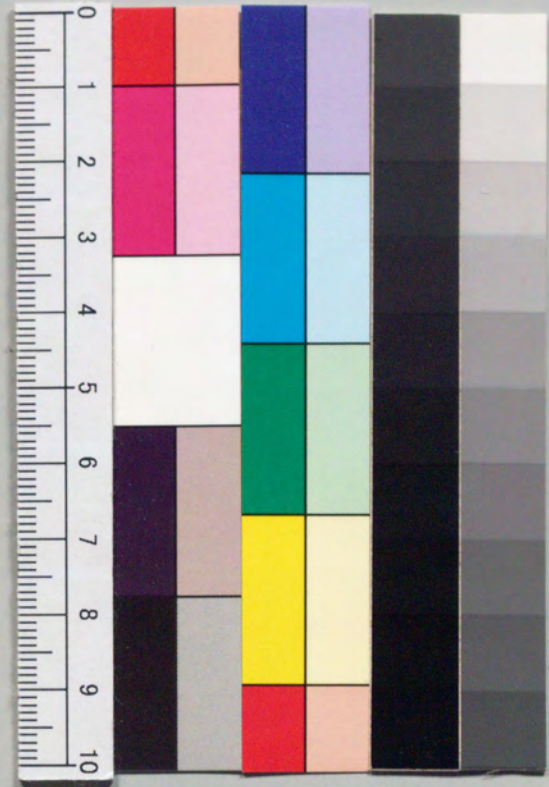


LA90.5-セ



LA

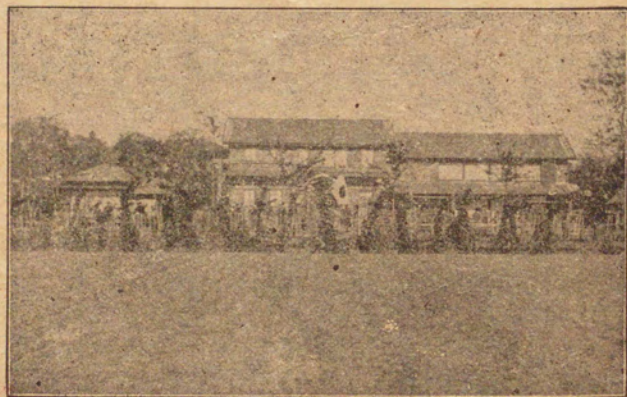
清香

(明治卅九年十月三十日發行)
每月一回三十日發行

(明治三十六年四月二十三日)
第三種郵便物認可



《號三十四第》



校舍及
道場

私立
明倫館
全景



9459

○本誌募集一目(ノ切皆十五日堅クノ切)選着ハ次回シトス

△正風門

○清香句集(當季三句一組入花交錢餘ハ貳錢社員一組無料撰者ヲ羽洲ノ幹雄。雀志。聽秋各宗匠交代トシ江面庵主ノ通巻トス)

△流行門

○紫集(新派俳句當季題三句限リ無入花他人ハ交錢撰者。小波。變音。素竹。無黃。黃雨。雨六。稻青。白山。柯客。各先生交代トス)

△花評門

○江面庵月次兼題募集。題「茸狩」「夷講」(以上一人一題二句四句ヲ以テ一組トシ社員無料他人ハ一組四錢餘ハ一組貳錢花評ノ天位ニハ端書五枚外染筆物呈上次回撰者ヲ托ス通巻ハ梅林庵宗匠撰三才五客景呈ス)

○互撰句募集(當季題トス天位ハハカキ五枚呈上他人ハ一題三句限リ社員ハ三錢他人ハ六錢トス位ハ短冊呈上ス)

○新柳樽(狂句題隨意政事ニ係ルモノハトラス三句一組交錢社員一組無料撰者郷左衛門宗匠撰トス)

○和歌(四錢ヲ要ス撰者ハ當時有名大家ニ托ス)

○情歌(高尙ナル者ニ限ル無入花一人三首ニ限ル社員外ハ一組四錢ヲ要ス寫亭金外先生撰トス)

○口投書(社員相互ノ問答可成簡短ノ一廣告的ノ者ハトラス數拾ハ限リ簡限内ニアリトス)



第四十三號

◎俳調門

(其二) 北村季吟

北村季吟は江州北村の人初め醫を業とし廬庵と云へり後に平安天津島の廟祝(ハフリ)となる貞室を師とし又貞徳の教を受く博聞強記國學に長せり諸書を註解する事五十餘種學力時の將軍家に聞け關東に召れて歌學所に補せられ食祿五百石を賜はり又門下より芭蕉を出し己れは寶永二年八十八歳の壽を以て終る。

一僕とばくくありく花見哉
腹筋をよりてやわらふ糸櫻
女郎花喩は、あはの内待かな
まぎくといますが如し魂祭
富士の山師走ともなき景色哉

◎正風門

新聲

句を作る思案もみせず雨の月

伊豆 凌 頂

◎注意。每號社員及ビ入花出吟者ハ天位及ビ規定ノ三才五客ニ入選シ當然賞品染筆物ヲ受クル資格アル者ハ必ず次回投吟ノ際郵券貳錢封入請求セラルベシ然ラザレバ常ニ整理ニ差支困リ入り候マ、必ず今回ト左様御注意相成度候。但シ景品請求ノ際ハ第何號何々宗匠撰ト御明記ヲ乞フ。

◎注意。各欄投吟ノ用紙ハ半紙二ツ切ニテ一種ニ限リ堅ニ書キ住所姓名雅號明記ノ一就テハ半紙四ツ切又ハ卷紙ニ書シ横書及ビ端書ヲ用ヒ或ハ一枚ニ數種ヲ記入シ草書ニテ書キ投吟ヒシ者ハ必ず没書シ加入セズ左様爲念申上候。

◎注意。紫集。清香句集。新柳樽集ハ各撰者二人ニ付必ず同シキ句ヲ一通ツ、半紙二ツ切へ堅書ニ楷書ニテ認メラル、ト。

△繪葉書所持者ニ告グ(表信料添附ノ上申込マルレハ江面庵主無料繪端書ニ併句ノ揮毫ノ需メニ應ス)

◎清香號外發行。

號外毎月一回發行スベシ掲載目ハ和文。和歌其他文學的講義及ビ作物等ナリ入用者ハ一冊貳錢ツ、拂込メシ。

大文字や真向かし。旭の御門 東京 其 鳳
かせ筋に伽藍あふなし大文字 同 同
二千外古人心

老の眼も千里はどゞく月夜哉 同 鳳 羽
明月や人定まりてうらかなし 同 同

武藏野にて

神山や十町入て月のやど 尾張 羽 洲
名月や行先々にやしらの灯 同 同
三河 石 芝
催馬樂の柏子とらまじ月今宵 東京 幹 雄
いそかしき心地なり是虫の秋 京都 幹 秋
寒月や波からおきる風の音 加賀 甫 立
出来秋や隣おくりの奉加帳 下野 磊 山
千粒の子もゆかりある柘榴哉 遠江 十 湖
松風も水音もなしあきのくれ 上毛 閑 窓
裏山の紅葉またる、小窓哉 相模 秀 巖
夜の雨の冷たきおとや破芭蕉 良夜大潰き

寝遅れし我にきけとや虫の聲
 秋の霜木の實も味の付にけり
 倚りかゝる橋のてすりや露の玉
 生壁の乾く匂ひやあきのかぜ
 眼瞼しに追ふも世柄や稻雀
 人も來す雨日もすから柳ちる
 初冬や水田の上の隈もなし
 見處やはなれしもまた松の月
 また淡き大根の味や初しくれ
 初汐や芦のたよふ難波瀉
 山門に夕陽べかつくもみち哉
 さきや影さへふまぬ御神木

甲斐眠石
 伊豫蘭腕
 越中柳露
 伊勢社樂
 武藏翠雲
 上總圭巖
 東京機芳
 遠江汀鷗
 人間藤水
 群馬曝光
 鹿主富寶
 同同

◎清香句集 尾州羽洲園宗匠撰(三才景呈)

△本評の卷。

(天) 天まつ茸や今朝北山の初たより 相模一華
 (地) 地神の鹿笛の音知らで老にけり 丹庄豊月
 (人) 人笛と琴つきの築山へだてけり 三河紫水

東京其角堂宗匠撰。(三才景呈)

△副評の卷。

(其二)

(天) 涙多きむかしをここや秋の暮 伊勢架月
 (地) 地りんど澄月は夜さむの初かな 伊豫慶
 (人) 人ゆたかさや千疊敷の稻むしろ 信濃泉舟
 わさ寒や洗ふた様なや虫の色 同木外
 寝轉べばすそ雨の淋しや秋の風 同新
 綿をうつつ夜も夜寒の一つかな 三竹
 打止た音とな秋ある礎かな 同三
 風わたるあしや立雁ふるす雁 尾秋
 軸 秋に立て秋にかくる風かな 撰者機塘

東京花の本宗匠撰。(三才景呈)

△同上 (其三)

(天) 静さや時雨來そな夜の暖み 武藏琢我
 (地) 地さくらにも聞た鐘なり夕紅葉 大山香洲
 (人) 人さげにあぢ持て忘る扇かな 陸前如柳
 さび鮎といふ名付て五十鈴川 三重とく子
 庵の秋出て見れば又よき夜哉 同梅窓
 埋火や匂はぬはなのつもる音 三河琴翠
 我に立つものは月見に秋の蝶 小榎湖楓

傾城の何に泣くやら秋のあめ
 月のなき夜わ虫にをく心かな 桶川六六
 詩に瘦た庵の主人や破れ芭蕉 三河蓬水
 不足なきひとの願やはなし鳥 川口釣月
 吹荒れたあとの澄けり秋の空 下總之仙
 下加茂にて 撰者羽洲

東京夜雪庵宗匠撰。(三才景呈)

△副評の卷。

(其一)

(天) 妹許の撫子にわにみだれけり 伊勢架月
 (地) 地夕貝や嵯峨の小家のたけ細工 武藏如々
 (人) 人あささむを握る仁王の拳かな 信濃蜻蛉
 風呂焚かぬ夜の淋しや虫の聲 伊豆來洲
 稻妻や跡に手ぬるき星が飛ぶ 信濃竹堂
 能き夢は佳境に入ん蚊屋の月 同錦
 人知らぬ始め終りやつゆの玉 伊豆新鳥
 三界を照りすましけり盆の月 同翠知
 善根を植ゆるも慾にはなち鳥 同梅香
 軸 粧や遠山眉のゆふ茜 撰者金羅

村丈の名所なりけりつき見堂
 秋の戸や押はこぼる月の影
 ゆきの雀小さきこころ配り鳥
 あしの聲おさゆる露の力かな 百間常六
 月に添ふ雲や夫にもあきの色 撰者花翁
 無造作や酒もさげくる月の友

◎通卷 江面庵主撰。(三光秀吟景呈)

あさ寒や川に影置く夜あけ月
 早稲の香やいなご追ふ尾無鶏 越中一松
 うつくしき夜の明色や花野原 信濃林川
 初雁の聲もつめたしやくら紙 群馬霜逸
 菊守や子は身に餘る叙位の沙汰 信濃考
 菊の香や女房の散らす紙薄き 大坂秋
 朝貝にあげばの酒の醒あすき 八戸浪
 兎角して紅葉に酒の醒あすき 信濃竹
 名月や琴開く松は邪魔になる 下總迷
 ふり向けは振向く方よ秋の聲 同蕉
 穂芒やしはしか聞くれゆとる 同仙
 落ちた儘かへす風なれ桐一葉 六田海
 初葺やうつり香もなき配り膳 常陸陽
 あきの聲風に力をつく夜かな 岐阜雪
 月に花に留守した老の十夜かな 長野華
 やせ畑に藍の花さくふもど哉 同熊
 ちる柳裸の富士を見る日かな 同半

菊持ちて佛前に立つおきな哉
 耶蘇教のつじ演説や散やなぎ
 軸友送る關宿船や雁の聲
 (◎三才逆座○秀吟同上)

愛知 石見 仙夢
 鹿主 琴月 寶

△ムラサキ 新聲

凱旋の馬やせたりなあきの風
 子の舞ふよはねるよ血の中
 秋晴や米のかつし水の多摩
 大原や雉子鳴あとの小ぬか雨
 朝霧や舟の女房の川手水
 行水の背中に秋の近つきぬ

東京 醒雪
 同 蝶二
 同 黄雨
 同 小波
 同 雨六
 同 瓊音

◎流行門 一の巻 星野麥人先生撰 (天景呈)

天百舌啼て杉の梢やあめ晴る、
 玉垣にわら干してあり赤蜻蛉
 穂芒に狐つるべくしかけかな
 笈を負ふて上京の途や草紅葉
 行あきや杭のからすに夕日影
 船舟に菜山子も讀めり赤蜻蛉

浦和 玉水
 伊勢 日外
 三河 栖雲
 三河 栖山
 京都 菅幕
 伊豫 志流

礫してくくりの二つ三つ
 あきの雨歌の納言は老にけり
 初松魚はなにをくれし憾かな
 た、秋を惜みて撫する義足哉
 軸吊蓑に秋雨のふと寂か也

信濃 青光
 伊勢 架月
 信陽 遊逸
 武蔵 如々
 撰者 黄雨

其四。巖谷小波先生撰 (天位景呈)

△通卷

天小春日や八瀬はし静な稜の音
 尼寺にはぎ散るあさの小雨哉
 鹿鳴やあめをさむがる泊り客
 虫賣の虫鳴く中をもとり鳥
 犬吼た夜に盗まれし南瓜かな
 山逕の卒如どたえて女郎花
 さりざりす鳴や夜陰の十夜燈
 百舌鳴くや夕陽浴びる神の森
 軸歸(ま)しと乙鳥にくもる海や

久喜 天帆
 伊勢 架月
 三河 三玉
 熊谷 笠齋
 信濃 正景
 三河 竹波
 武蔵 弄仙
 瓦葺 光月
 撰者 小波

◎謹告。花評門撰者より通卷不着に付次號に發表す以上謹告候也。
 係白

灯見ゆる芒のひまの關屋かな
 水村や芒穗に出て鶴かなし
 軸蜘蛛の圍や虫のから吹く秋の風
 其二。沼波瓊音先生撰 (天位景呈)

三河 昇龍
 伊勢 吸月
 撰者 麥人

△通卷

天鹿なくや雨を寒かるとまり客
 地圖出して見る岐道やはな芒
 落栗や一つくりに夜のあくる
 桐一ト葉晝寝無用と落にけり
 霧晴や松を放れて鶴のとぶ
 長き夜を弓馬の故實調べけり
 稻妻や切りたほしたる二本杉
 尼寺に萩散るあさの小雨かな
 軸水引のすいく路を塞ぎけり

三河 三玉
 同 栖山
 信濃 錦鳥
 同 同上
 同 同上
 新町 貞壽
 瓦葺 茶友
 伊勢 架月
 同 同上
 撰者 瓊音

其三。川村黄雨先生撰 (天位景呈)

天暮鴉低う新樹の山へ戻りけり
 啞書いたすまり洗ふか小傾城

美濃 石聲
 信濃 翠仙

◎滑稽門

天下駄で春をついででも低い生
 乞食は大きなみちで世を渡り
 待遇一變ちやだいの利目なり
 叱られて腹が痛と寝てしまひ
 笈を負ひ都に登り車夫で死に
 馳ながら出た瀛車を呼田舎媼
 軸電車道え夜店を出て叱られる

伊豫 玉翁
 信濃 竹蔭
 熊谷 半舟
 浦和 飛龍
 三河 蓬水
 武蔵 鳴鳩
 撰者 郷左衛門

△同上

天鯨食ふ猫はせげうに目もく
 居候熱い茶にめしうめて飲み
 親指を出して書寝を起して
 縁は異なもの遠くて近い星董
 あれがそのさつき話の影法師
 御祝儀の催促仲居うたにする
 風鈴がちんども言はぬ暑い窓
 軸厄介な荷をこどづかる旅行先

伊豆 知新
 三河 栖山
 信濃 好文
 同 同上
 同 同上
 岐阜 春風
 撰者 郷左衛門

◎俗語門

秀月も覗かぬ葎の宿に蟲も哀れを啼き明かす

東京 静亭遊升先生撰 (天景呈)
 阿波 九荒
 伊豆 豊澤茶樂

人目忍ぶの君よあらで又も水鷄叩く脊戸

信濃 館林雲方

蟲よ啼け〜夜中も朝も啼て哀れ盡るなら

熊谷 脱俗庵迷佛

怖々不實を咎める嫁も笑を含んでそつと云

信濃 竹内竹蔭

来る〜かと片山里に主をまつ蟲啼き明す

信濃 中澤雪岳

(天) 逢に來たのに逢れぬ辛さ蟲も察しそつと啼

撰者 靜亭遊升

(軸) 耳に馴ても身に染渡る待ど來ぬ夜の秋の鐘

◎清香支社長名譽評。信州生蘇居宗匠撰。

(三才景呈)

(天) 鐘聞て母にもものいふ夜寒かな 伊豆 知新

(地) わきさひや黙て通る夕からず 遠江 五洲

(人) 磯畑は蜻にもひくか鳴子なわ 常陸 臥牛

親にのみ釣る夜を蚊帳の別れ哉 韃町 八千代

蓮のあめ机のゆめを破りけり 信濃 青光

取組た角力にたつや人のなみ 大坂 霞山

(定) ○○○馴れねは馬に乗るも貧苦勞

○○登る旭に露のこぼる、

○○一寸容には冷酒がよ

甲斐花川 石見一井 下總之仙

風雅欄

庶主ヨリ庶號雅號ヲ得タル人ノ披露社員中立机判者ノ列ニ撰ハレタルモノモ此欄ニテ披露スベシ

△信州三村多雪雅君ニ岳南居の庶號を贈る

△庶號ヲ賜ハリテ

江の北に庵まうけて月見哉 正景

△脱俗庵ナル庶號ヲ賜ハリテ

蓮の實のどふ手懸り今朝の風 迷佛

△入門ヲ許サレテ

ゆるされて末座を汚す月見哉 菅幕

△信州木下琴齋君ニ江松庵ヲ贈リテ判者ニ列ス。

△下毛大場一凡君ニ松月庵ヲ贈リテ判者ニ列ス。

△上州關口醉花君ニ江瀧庵ヲ贈リテ判者ニ列ス。

△越後高橋美佐雄君ニ松葉庵ヲ贈ル。

△庶主ヨリ机ヲ賜リテ

江に蔭の入りて色増す紅葉哉 琴齋

△三河水野安太郎君△越後高橋美佐雄君△下關三浦錦石君

△足利大場一凡君ノ入門ヲ許ス

虫鳴くや長者の忍ぶ庭のてり 川口 如月

覺悟して居れども桐の一葉哉 同 魯仙

川煙吸をどときならぬ夜寒哉 撰者 希世起

◎同上 信州江廣庵宗匠撰 (三才景呈)

(天) 蟬鳴やたけの香たかき通り雨 大坂 霞山

(地) 川狩やうしろに寫る月のあや 伊豆 來洲

(人) 籬迄て來て夕蟬のそまりけり 美濃 石聲

方丈の眞晝閑なりせみのこえ 信州 蜻蛉

川狩や月に魚撰るたけのうえ 伊勢 架月

風は皆木々に治めてせみの聲 伊豆 木鈴

川狩やこつそり誘ふてら男 武藏 無洲

蟬鳴や埃の匂ふ袋町 岐阜 其洲

啞蟬の居るや庄屋の痛さくら 武藏 如其

許されし机に菊の薫りかな 判者 富雪

附勝歌仙

(俳諧練塙) 庵主捌 夏野の巻 (社員一人三句付無入花ノ切十五日)

聞なれていつも長閑な笑ひ聲 武州 鷺山

郷で名高き家の別荘 信濃 竹蔭

芦の湖富士を倒に影うつし 三河 栖山

◎注意。庶主ヨリ庶號又ハ雅號ヲ欲スル人ハ(社員ニ限ラズ雅人一般)江面庶號事ニ申込ベシ順次ニ庶主揮毫ノ額面及半切其他染筆ヲ添へ下附スベシ但返送費三錢御送附ノ事發表ハ此ノ欄ニ於テス△尙入門ヲ欲スル人ハ入門願ヲ出スベシ、サスレバ其ノ許可ハ此ノ欄ニ於テシ特待スベシ。

△支部設置ニ關スル注意 本誌一ヶ年分又ハ半ヶ年分前納者ヲ社員トシ各欄一組無入花出吟ヲ得此社員五名以上勸誘セシモノハ支部長トシ社費ヲ免シ、支部ヲ設置ス支部設置ノ認可ハ本誌上ニ發表セラル、ト同時ニ効力ヲ有ス

支用ニテハ庶主ノ筆ニナル蕉翁ノ像及御句軸物用半切及額面ヲ贈ル尙撰卷ノ評及染筆物ハ無朱料ニテ乞フヲ得、支社ハ十名以上社員アル地ニ設ク支社長ハ本誌集卷撰評ヲ托シ入

門セシ者ハ其ノ程度ニヨリ判者ニ推選シ毎月交代ニ依囑ス特權支部ニ準ス。

△支部長支部員ノ待遇、支部支社長ハ毎月特許選者ノ權ヲ有ス

而シテ支部支社長併壇ニ投吟ヲ得支部社員

ハ二組迄無入花尙獨社員ニテモ毎回不怠出

吟者ニハ風雅欄ニ發表セラレタル者ニ限り大

家染筆ヲ呈スベシ。

△支部支社設置報告

武藏瓦葺支部ハ社員増加ニ付支社ト改稱シ社長ヲ左ノ通り定ム。

武藏 瓦葺支社長 家里茶友殿

右支社ニテハ幹事二名ヲ選舉報告スベシ。

三河國小原支部長 水野安太郎殿

信濃國芳川支部長 小松一力殿

右支部支社設置各特權ヲ有ス帳簿登錄済。

尚信州眞島支部設置ノ件許可ス支部長至急報告セラレヌシ。

△社費領收

半ヶ年分中島。須藤。鳥羽。佐竹。小林。中澤。吉田。大野。江森。辻。水野。大岡。二。同昇。二見。深山。羽鳥。篠田。藤。同甲。同千。鈴木。松風。霞遊。栖雲。竹波。大山。根本。廣瀬。天田。の諸氏。△一ヶ年分。水野安片山藤本同廣徳田水野來。沼上。大高。水上。渡邊。の諸氏。以上。

一金五拾錢也 信陽 高木富雪殿
一金拾錢也 三河 水野安太郎殿

ゆく秋や繩解てやる作りまつ 三河 栖山
寝乱れし秋のすがたや朝の月 熊谷 半舟
秋深し月の車に桐一葉 伊豆 つかさ
湖に雁行く影や後の月 執事 緑蔭

◎互撰 出吟者ハ天地人ヲ撰ミテ十一月十五日迄二通知スベシ息ルモノハ登第スルモ無効トス天位規定ノ景呈ス、△第四十號成績ハ左ノ如シ

- 天位 (二七) 朝もやに木魚の音や蓮薫る
- 地位 (二四) 我が影は笠にかくれて蟬時雨
- 八位 (二七) 煙吐く山を根にして雲の峯
- 次点 (二四) 川蟬や沙にやせたる施餓鬼杭
- 同 (二二) 夏瘦も見ぬ月夜の納涼かな

以上三才當撰者ハ申出ラレベシ景物呈上ス。
△頭痛て秋の夕の思案かな△尼寺の尼うら若し秋の雨△されざれの雲に秋立つ暮色哉△頬杖に更ける机や露の音野育と思えぬ色や女郎花△今日は又何して過ぎん秋の雨△更るのも床しき月の蕙かな△晝も氣の燈みけり須磨の秋の聲△秋雨や寂の底知る葎の戸△夕焼の紅葉眺むる阿闍梨哉△風呂桶に琴聞く宵や渡る

一金拾錢也

越後 高橋美佐雄殿

△前金切ノ諸君ハ自然社員タルノ特權消滅スベケレバ此際帶封御注意相成度前金切ト朱書仕り候間必ズ御拂込被下度不相變社員トシテ充分御盡力ノ程相願申候也。

△支部長俳壇 (四季混題澤山募集)

御佛の來る夜もあるか露明り 常陸 月堤
 名月や晋子も酔えし茶梅酒 川口 釣月
 菊つくる翁のかさや赤蜻蛉 下總 之仙
 洗濯をせよとて啼かぬさの鳥 伊豫 志流
 △寄凱旋將士
 遠くからもて囃さるゝ花火哉 常陸 美稻
 初初の稻にゆたかな重みかな 信濃 正景
 △支社長俳壇 (同上)
 白蛇見る松の洞やつたしげる 五葺 茶友
 暮れ初める日影を吹や秋の風 信濃 富雪

雁△聖詩一篇抱いて虫を聞夜哉△絃や冥想千里星月夜△冷かに枯徹るや月眠る△蟬の啼く奥に金閣聳えけり△弦月の端山に落ちて鹿の聲△山寺の額字燦たり夕紅葉△紅葉して土佐繪に似たり月見堂△玉卷の芭蕉に注ぐ冷雨哉△鬼灯や窓にとひ寄る針の友△虫放す草に風あり盆の月△卯の花に花よむ雨の夕べかな△蚊帳にせまる山の翠や温泉の二階△夕立はれて天の一角星見ゆる△教會の月や牧師の髯白き△山門の鐘樓高し蕙紅葉△白蓮の薫る朱欄の池亭哉△戰濟んで故山閑なり時鳥△稻妻の闇をたち切る夜半哉△夕日さす仁王の肩や蟬の聲△念入て見るや牡丹の花盛り△茶を瀝く佛の顔の光り哉△盗人は竹の子藪にかくれけり△ちる萩にひらく萩ある山路哉△初秋の挨拶するや垣隣り△秋立や夜明に遠き天の川△捨畑や菊は寝て咲き起きて咲き△秋の山色なき風に染まりけり△開店に柳のこぼるゝ新酒哉△人の間を見ては水打街の雨△鮎馴るゝ間にとて船の支度哉△内儀にも可愛かられつ竹婦人△落つるのも浮世の事や桐一ト葉△行末

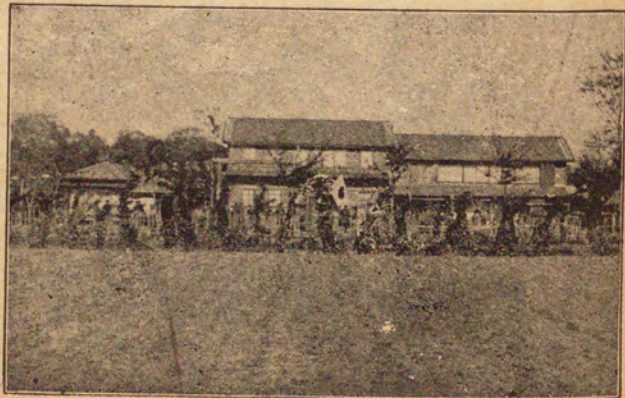
清香

(明治廿九年十一月卅日發行)
 (每月一回三十日發行)

(明治三十六年四月二十三日)
 (第三種郵便物認可)



《號四十四第》



校舍及ビ道場

私立明倫館全景

は榮華の友よ種瓢△貝吹へて風呂の知らせや
 鹿の星△海を見に窓覗かはや風薫る△濁りな
 き世にどくく△の清水かな△花卯の木散る度
 闇の動きけり△豊年や里は芝居の太鼓の音△
 散る木の葉地蔵の顔を打ちにけり△菜の花行
 きつ戻りつ譽めにけり△一葉つ、秋深めけり
 空の色△都にははなれて遠き砧かな△碑文の
 年毎寂ひて芒かな△二日とは雪を踏せぬ都か
 な△鍋よりも口に蓋せよ餓と汁△翻したる水
 の名變る寒かな△耶蘇教の辻演説や散柳△萩
 散りていよ△庭の古ひけり△毛見濟て酒買
 にけり五戸の村△松風に座敷も床し梭の音△
 以上

△本誌定價參錢郵稅五厘六部拾六錢拾二部參
 拾錢社員トナルニハ半ケ年以上誌代前納者ト
 ス但シ募集欄一組宛無入花ノ一規定別ニ定ム
 社員五名以上ノ地ニ支部十名以上ノ地ニ支社
 ナ設置シ勸誘ニ勉メタルモノヲ支部長支社長
 トシ便宜ヲ計ルベシ誌代拂込ハ郵便替爲ニ限
 ル不止得切手代用ノ時ハ五厘切手トス。原稿
 其他ノ投稿凡テ本社發行所宛ニ願上申候也

◎廣告(廣告料一行三錢回数發行數ニヨリテ割引スベシ)



株式會社 久喜銀行
 同 北葛飾郡幸手町
 同 幸手支店

銀行一般業務精々御便利ニ取扱申候也

- 一 定期預金 (一ヶ月六分五厘 六ヶ月六分)
- 一 當座預金 (日歩金壹錢參厘)
- 一 小當座貯金 (日歩金壹錢五厘)
- 一 貯蓄貯金 (年六分)

明治三十九年十月廿九日印刷 (一部三錢)
 同年三月三十日發行 (郵稅五厘)
 埼玉縣南埼玉郡清久村大字所久喜廿四番地 德
 發行兼編輯人 龜田貴平
 埼玉縣南埼玉郡岩槻町二百四十四番地 平
 印刷人 水野武平
 埼玉縣南埼玉郡江面村大字下早見 香
 發行所 清水香
 電信畧號 〇七

△本誌募集一目(ノ切運着ハ次回廻シトス)

△正風門
 △清香句集(新年ノ題三句一組入花袋錢餘ハ貳錢社員一組無料撰者ハ羽淵、幹雄、重志、聽秋各宗匠交代トシ通巻ハ江面庵主撰トス)

△流行門

△紫集(新派俳句新年題三句限り無入花社員外ハ袋錢撰者小波、環音、春竹、夢人、雨六、無黃、黃雨、稻青、白山、柯客、各先生交代撰トス)

△勅題集(新年松題無入花一八四句限り天位勅題蓋費軸物半切呈全國大家宗匠分撰トス)

△花評門

△江面庵月次兼題募集(題「門松」「初日出」以上一入一題二句ツ、四句ヲ以テ一組トス但シ一題ツ、別紙ニスルヲ社員無料他人ハ一組四錢餘ハ貳錢花評天位ニハ端書五枚外染筆物呈上次回撰者ヲ托ス通巻ハ梅林庵宗匠撰トス)

△互撰句募集(一人三句限社員ハ三錢他人ハ六錢トス當季題トス天位ハガキ五枚呈他ハ短冊呈上ス)

△新柳梅(狂句題隨意政事ニ係ルヲ禁ズ三句一組袋錢社員無料撰者嚴先生トス)

△和歌(新舊トモ勅題三首限無入花餘人ハ一組四錢ヲ要ス撰者ハ當時有名大家トス)

△俳句(高尙ナル者ニ限ル無入花一入三首ニ限ル餘人ハ)



△正風門▽ 「新學集」

秋すむや撫てやりたき富士の脊 東京 其風
 濃くうすくそめて誠の紅葉かな 同 梅谷
 ぬくい日の裏崩れして紅葉ふく 同 鳳羽
 朝川にあらひあげたり九條いも 尾張 羽洲
 やまみちや雉子のかけ行小六月 遠江 湛水
 △石山にいたる小舟中
 行秋といもにくゝるや勢田の橋 大坂 露城
 たきかゝる槽から蟻の親子かな 駿河 淇水
 みのつかを念入て聞くしくれ哉 東京 菊外
 つゆ霜や結ひさしてあり小柴垣 大坂 北叟
 寒さくや醫師の來ぬ日の庭步行 遠江 十湖
 礫かぞ見ればこゑあり三十三才 上毛 閑窓

清香 第四十四號

◎注意。每號社員及ビ入花出吟者ハ天位及ビ規定ノ三才五客ニ入選シ當然賞品染筆物ヲ受クル資格アル者ハ必ず次回投吟ノ際郵券貳錢封入請求セラルベシ然ラザレバ當ニ整理ニ差支困リ入り候マ、必ず今回ヨリ左様御注意相成度候。但シ景品請求ノ際ハ第何號何々宗匠撰ト明記ヲ乞フ。

◎注意。各欄出草投吟ノ用紙ハ半紙ニツ切ニテ一種ニ限リ堅ニ書キ住所姓名雅號明記ノ下就テハ半紙四ツ切又ハ巻紙ニ書シ横書及ビ端書一枚ニ數種ヲ記入シ草書ニ書キテ投吟セシ等ハ必ず没書シ加入セズ爲念申上候。

◎注意。紫集。清香句集。新柳梅。勅題集ハ各撰者二人ニ付必ず同シキ句二通ツ、半紙二ツ切へ堅書ニ楷書ニテ認メラル、ト。

△繪葉書所持者ニ告グ(返信料添付ノ上申込メバ江面庵主無料併句ヲ撰者シテ差上ク念スタンプ押捺シテ差上ク)

さへげばや天長節のきくのはな 阿波 一英
 露の玉人のさどりのかのみかな 相模 秀巖
 こもを出た酒の匂ひやいちの月 長門 其桃
 はつ霜にすゝめすべるやをに瓦 遠州 汀鷗
 柿紅葉板屋にかりりほろりかな 麻主 富實
 枯尾花撫つる地藏のまかは可南 同 同

東京春秋庵宗匠撰 (三才景呈)
 (天)朝夕の雲をさかへてあきの山 伯耆 道牛
 (地)露も香に立つや千草の花さかり 信州 欣月
 (人)晴切て松かけくらし今日の月 小樽 仙楓
 あき深めゆくや水音かぜの音 信州 雲方
 遠退て鳥の見て居るか、し哉 下毛 一几
 冴わたる月影寒しきりざりす 三重 静江
 日は落て小雨明るき花野かな 同 梅窓
 賑はひは何處も同じ豊のあき 長野 木外
 秋の山見て居れば日の暮に見 越后 美佐雄
 似た家の多き在所や枇杷の花 三河 琴翠

ゆきの雀小さき心くばりけり
 穂芒やしはしの間くれゆとる
 鶯や行とさきこばす羽のひかり

川田谷六六
 下總之仙
 撰者 幹雄

伊豆孤山堂宗匠撰 (三才景呈)
 天文月や戀のたまづさぬり机
 虫の音も絶へぬ計りや秋の月

信濃青光
 伊勢溪月
 遠江仙水

あささむや粗すべの洗ひいも
 下京も同じ家風やきくのさけ
 初雪やまた菊に香のある垣根

原市東洲
 下關錦石
 信濃幸石

隔てなき薫りや菊のみだれ咲
 鷹が来て消てなくなる雀かな

撰者 凌頂
 石見一井新石

横濱夜半亭宗匠撰 (三才景呈)
 天戀心うつす夜もある砧かな
 地しくる、や松にからまる夕煙

愛知湖水
 東京雨雀
 尾道春山

馬叱る聲もさきこゆる枯野かな
 露のまゝ折たきものよ萩の花

遠江朝重子
 遠江八重子

懸け餘る布團や積むも馳走振
 押あふて共に寝たる尾花かな
 鐘はかり暮て行けりゆきの上

石州喜路
 信州嵩山
 愛知夢山

結構な日を昔寝して綱代もり
 自菊の霜に酔けり秋のくれ

長野其仙
 不動其仙

夢の世の拾ものなり冬のうめ
 理火や寒といふも氣のゆるみ

撰者 花翁

埋れて居るや落葉にちから石
 愛しき兒を借りて来て巨達哉

下毛柳由撰
 同下毛

見返りの柳見返る寒き夕鳥
 秋もはや木立たのしむ夕紅葉

津島
 岐阜梅
 入間華

石切の日向に又かゝと年の暮
 歌種の無盡蔵なり初時雨

越中
 入間梅
 信濃翠

谷川の底まですけて冬木立
 澁柿や枝のかゝすも思案かな
 ふたごゝろなき交りや餓さ汁

尾張湖鬼
 愛知眞水
 下關春

大磯鳴立庵宗匠撰 (三才景呈)
 天酒になる川へ流れよをとし水
 夕日さす砦のあとやつた紅葉

下關錦石
 讀枝龜
 伊豫茶友

鼻紙に吸壳を消す十夜かな
 結構な日を晝寝して綱代もり

同廣草喜
 同廣草喜
 同廣草喜

宿とつて雪面白ふながめけり
 くれやうも遅ひと思ふ小春哉

撰者 松汀
 香川梅嶺

東京花の本宗匠撰 (三才景呈)
 天夢の間に花を孕むや眠るや虫
 地稻刈て芒に渡すのかぜかな

三重梅窓
 三河昇龍
 八戸北

月枯の数に見らるゝ草家かな
 冬枯の数に見らるゝ草家かな

上野唇
 三島唇

柳散る下の小魚の浮ゆるかな
 世の常の人とは見えず菊の主

尾道松精
 安藝花家
 徳島床石

人知らぬ梅笑はせて冬牡丹
 須磨寺に詣る夜も啼く千鳥

武蔵湖
 同武蔵湖
 同武蔵湖

初茸の香に降り出す小雨かな
 心まで浮へて舟の月見哉

同同同
 同同同
 同同同

納豆賣引く糸程の渡世哉
 及物研く合間を軒の小春哉

同同同
 同同同
 同同同

燈前に秋雨細し野田の宿
 日は家の内より暮れて雪明り

信濃
 常陸
 常陸

龍田姫織りなす山の錦かな
 何となく合羽の上や冬の鰯

信濃
 足立
 尾張

秋の山熊手かつぎて登りけり 信濃 啓山
 秋の日のかゝりと當る障子哉 松山 他郷
 秋晴れや雀追はんと繩を引く 同 同上
 軸 狼の聲におのゝく家禽かな 判者 稻 青

△滑稽門▽
 東京巖先生撰 (天位景呈)
 天月に見美人を今日日比谷で見 江面 緑 蔭
 秋風が立つて孕むは稻穂なり 信濃 好文
 舊作の投書廢物利用なり 同 竹 蔭
 鶯鷺をモデルにするは若夫婦 三河 栖山
 口笛で戀文を読むひさしがみ 京都 菅 幕
 素人芝居せりふ忘る死に損ね 駿河 欣 月
 軸 賽銭の俄雨する口説教 撰者 郷左衛門

△俗語門▽ 東京靜亭遊升先生撰 (天位景呈)
 秀八重の山吹派手には咲けぬ末は實の無い事
 斗り。 信濃 久 月
 便りつれない身の果敢なさを一人思案に暮

〔全〕 漢菴やく烟の末に日は落ちて入江さひし
 く秋風のふく 香川 岩田 香嶺
 仇をもるとりての昔しのべとて風になび
 ける旗ずゝき哉 勝又つかさ
 〔軸〕 刈り入れし庭の稻穂をぬらすともはずと
 もわかず時雨ふる也 撰者 龜田 柳渚

▽花評門▽ 江面庵月次兼題。
 △京都江天庵先生撰 (天位景呈)
 天 苦列ねて見送る雁の行衛かな 千住 木 岳
 雁數行練兵場をわたりけり 屈 崇
 はつ雁の鳴くや堅田の薄月夜 三河 花 鐘
 ふるさを忍ぶ寝覺や雁の聲 信陽 放 玉
 雁鳴くや雲とへだつる友戀し 三河 柳 枝
 羽遣ひも見ゆるや月の天津雁 長野 一 熊
 雁かねに堅田の便り聞かん哉 撰者 菅 幕

△八戸北岱先生撰 (天位景呈)
 天 瀧水のひとすぢ白し遠もみぢ 常陸 寛 友
 紅葉狩つみなき鐘を恨みけり 吉羽 陽 海
 紅葉狩つみなき橋を渡りけり 大坂 秋 蟬
 色變へぬ松に錦やつたもみぢ 三島 三 省

の鐘。 浦和 玉水
 胸にかへりし雲さへ晴て嬉しう今宵の月を
 見る。 安藝 景嶋人
 切ればせぬかと逢ふ度念を入れて心を引鳴子。
 信濃 錦 鳥
 堪へ袋まいつしか穴が明いて思はず翻す愚
 痴。 同 靜 竹

天 歸す未練に留たは夢で醒りや両手を握る汗。
 影 月
 軸 書た月日が笑顔をさせる洗ふたび見る桶の
 底。 撰者 遊 升

◎龜田柳渚大人撰(舊派和歌) (天位景呈)
 來てみれば我が故郷にわれなら傳にしき
 を着たり庭のもみち葉 阿波 花 廼家

佳調 學ひやに通ふわらはのけなげにも道た
 どりけり今朝の白雪 兵庫 宗野 影月
 霜さゆる小野のしの原小夜ふけてみ空に
 すとき月の影かな 信濃 芳 園

染分たやうになつあり紅葉山 信州 雲 方
 染め足らぬ枝から暮る紅葉哉 藤間 彌 生
 軸 かせ吹けば空に錦の紅葉かな 撰者 北 岱

九軌梅林庵宗匠撰 (通卷三才景呈)
 天 神鏡の奥にも拜むもみぢかな 千住 木 岳
 地 雁鳴や下くべはしき仕舞風呂 信濃 錦 鳥
 雁鳴や襟もどさむき旅まくら 下毛 一

何焚て酒あたゝめんもみぢ狩 信州 靜
 もみぢ折て籠の梅を氣取けり 熊谷 半
 くれ兼て居るや紅葉の山積き 伊勢 日
 雁啼や浦は夜沙のどほあかり 上野 曠
 軸 どの山も見劣りもなき紅葉哉 撰者 芳 華

支社支部長 信陽生 蘇居宗匠撰 (三才景呈)
 天 咲音に露のこぼるゝうてな哉 石見 一
 地 葉に關をのこして蓮の夜明哉 大坂 霞
 川 狩のかにを這せる坐敷かな 伊豆 知
 蓮に降るあめ大粒に思ひけり 遠江 五
 灯をげせは夜は明て有蓮の花 伊豆 知
 途中まで提灯て來し蓮見かな 石見 知
 蓮の間や明ぬ内から茶の仕度 信州 琴
 鐘撞てひろけし蓮の巻葉かな 信州 雀
 夢

軸疾に來て居たとも言ぬ遊見哉 撰者 希世起

下毛松月庵宗匠撰 (三才景呈) 入間 常 雄

(天) 戻りに寒き鐘聞く紅葉かな 伊豫 茶 塘 樂

(地) 忠臣の名もかむはしや菊の花 伊豫 茶 塘 樂

(人) 海遠し山また遠しいなむしろ 伊豫 茶 塘 樂

軸 鳴立たれどや入江につきき一つ 撰者 一 几

(天) 伊豆勝又つかさ宗匠撰 (天位景呈) 武藏 琢 我

よの慾もはなれ坐敷や菊の主 千葉 香 如 水

菊守や子は身に餘る叙位の沙汰 群馬 香 霜 嶺

寄る年に似合ふ頭巾や庵の主 大坂 秋 蟬 川

唐辛子に甘ひかど問はれけり 伊豫 慶 風

軸 八重垣も隔てぬ菊の匂ひかな 撰者 つかさ

上毛江瀧庵宗匠撰 (三才景呈) 信濃 遊 逸

(天) 初雁や野末の小家の夕灯し 信濃 風 柳

地 戦く度雲をうごかす尾花かな 信濃 春 翠

人 あき深し只一色のうみとそら 撰者 醉 花

軸 時雨るや殿を通ふ小提灯 撰者 醉 花

江に影のうつる紅葉の庵かな 常陸 耕 雲

▽去月七星庵の御染筆を賜り同日先年來聊か戦功の叙勳あり喜ひの餘りに

身 入門を許されて 群馬 霜 川

ゆるされて嬉し月見の仲間入 三河 琴 翠

▽常陸高木梅月君に春風軒の庵號を贈る。

▽北海追道谷君に江朗居任棟の庵號を贈る。

▽三河國都築真君の入門を許可す。

▽庵號を賜はりて

笛啼くや我も頂ぐ此日脚 越後 美佐雄

ゆるされて通る座敷や炭薫る 同 醉 花

御机をかざりて冬を籠らばや 上毛 醉 花

▽以下次號トス。

東京青木静軒先生撰 (天位景呈) 長野 琴 齊

(天) 川形にならぶぎぬたの燈かな 下關 錦 石

をち栗や梢はなれぬ子もち猿 阿波 九 鹿

暮れのこる畑一枚や蕎麥の花 三島 雪 可

時雨るや富士の裾野に立上煙 大塚 雲 江

百舌啼て日は落にけり竹床几 出雲 其 齡

軸 何さまやうを都大路を秋の蝶 撰者 静 軒

(天) 信陽江松庵宗匠撰 (三才景呈) 川口 釣 月

天ぞだ賣や京へみやげの初紅葉 遠江 朝 月

地 虫啼く秋の氣色も夜におほき 石見 琴 月

人をもしうし何に置ても丸き露 撰者 琴 齊

軸 花の香もありけな色や梅紅葉 撰者 琴 齊

△附勝歌仙▽ (俳諧練塲) 庵主 捌

夏野の香 (社員一人三句付無入花ノ切十五日)

聞なれていつも長閑な笑ひ聲 信州 鶯 山

郷で名高き家の別荘 三河 竹 山

芦の湖富士を倒に影うつし 甲斐 花 川

馴れねは馬に乗るも氣苦勞 上總 之 山

(定) 〇〇〇〇 更に角に學の道も近みゆき 下總 之 山

△風雅欄▽ (机判者ノ列ニ撰ハラシモノモ此ノ欄ニ)

無朱料ニテ乞フ事ヲ得。支社ハ十名以上社員

アル地ニ設ク支社長ハ本誌集巻撰評ヲ托シ入

門セシモノハ其程度ニヨリ判者ニ推選シ毎月

交代ニ依屬ス特權支部ニ準ズ

△支社長支社員ノ待遇。支部支社長ハ毎月特評

選者ノ權ヲ有ス而シテ支部支社長ハ毎月特評

ヲ得支部社員ハ二組迄無入花尙單獨社員ニ

テモ毎回不意出吟者ニハ風雅欄ニ發表セラレ

タル者ニ限り大家染筆ヲ呈スベシ。

一金拾六錢
 一金參拾五錢
 一金四拾錢
 一金貳拾錢

有難く
 拜受仕候也

高木富雪殿
 都築杜宇殿
 三浦錦石殿
 旭光殿

△前金の諸君は自然社員たるの特権消滅すべければ此際御注意相成度前金切と朱書仕り候間必ず御拂込被下度不相變社員として充分御盡力の程相願申候也。(會計係)

△支部長 俳壇 (新年の句澤山募集)

△支部長の部

山茶花や薄きは寒き朝の内
 寒月の影ものすこき霜夜かな
 史に耽る燈の細る夜寒かな
 行鴉雪のけしきとなりにつり
 新米や煙りの太き片田舎
 琵琶抱て秋の戸探くる法師哉
 鐘撞くやはらく推の落る音
 遠山に夕影残る紅葉かな
 小春日や江の面に寫る鶯の影

三河 旭
 愛知 曾
 下毛 一
 川口 琴
 三河 釣
 伊豫 流
 下總 翠
 常陸 月
 信濃 景
 正美 稻
 景 仙

△支社長部の部

此頃の花に氣を置く寒さ哉
 一輪の花に氣を置く寒さ哉
 寂莫を破りて響く鳴子かな
 身に染みる草鞋の冷々鳴の聲
 眼に立や紅葉の中の松ひと木
 風や瘦川渡る狐の火

三河 杜
 八名 栖
 信濃 富
 宮縣 希
 瓦井 茶
 友 起
 雪 山
 宇 宇

俳壇

(大正二年十二月三十日發行)
 (毎月一回三十日發行)



第百三十四號

△表紙文學

供若水 公事根源

若水さいふ事は去年御生氣の方の井
 をてんして蓋をして人に汲せず春た
 つ日圭水司内裏に奉れば朝餉にて之
 をきこしめすなり新玉の春立つ日之
 を奉れば若水さは申すにや云々

◎各掲載料設定。廣告料五號一行二十字詰拾錢十行以上一割引。歌仙掲載料。歌仙五拾五錢五十韻九拾錢百韻壹圓六拾錢。料金ハ小爲替ヲ以テ拂込ノリ切手ハ御斷申上候。(廣告係)

▲本誌定價。郵税五厘六部拾六錢十二部參拾錢社員トナルニハ半ケ年以上誌代前納者トス但シ募集欄一紙宛無人花ノト規定別ニ定ム員五名以上ノ地ニ募集欄一紙宛無人花支社ヲ設置シ勸誘ニ免メタル者ヲ支部長支社長十名以上ノ地ニ計ルベシ誌代拂込ハ郵便爲替ニ限ル不不得場合切手代用ノ時ハ五厘切手トス原稿其他ノ投稿凡テ本社宛ニ願上申候也。

◎各庵新聲拾遺集

名月の雨に心もしめりけり 伊豫 晃
 夜もすから敷足す月の庭かな 信州 稻
 阿漕か浦にて 不動岡 應
 月追ふてゆく聲遠し小夜千鳥 上 圭
 世かたりや豆煮こぼして夜半の冬 伊勢 社
 唐崎の松も黒みて初しくれ 伊勢 社
 粧ひし山の錦や水うつり 備中 如
 さし込の日も冬至なり宿の梅 信州 雨
 光淋の繪屏風古りぬ菊の花 越江 落
 葉

互撰ハ次號廻しとす澤山出吟を乞ふ。(係)

明治三十九年十一月廿九日印刷 (一部三厘)
 同 年 同 月 三十日發行 (郵税五厘)
 埼玉縣南埼玉郡清久村大字所久喜廿四番地
 發行編輯人 龜田 貴
 埼玉縣南埼玉郡岩槻町二百四十四番地
 水 武 平 德

▲本誌募集一日 (選者ハ次回廻シトス)

○清香句集。當季三句一組入花袋錢餘ハ貳錢誌代前納者一組無料入花出吟者ハ二組以上出吟ニアラザレバ冊子發送セズ選者羽洲。石芝。聽秋。蝸堂。富實。其他全國大家交代トシ寶泉居ノ通卷トス通卷ノ天位ヲ得タル者ニハ次回ノ花評ヲ托ス副評ハ全國風交宗匠交代トス。

○紫集。新派俳句當季三句限り誌代前納者ハ無入花他人ハ入花袋錢選者境音。醒雪。小波。夢人。愚佛。素竹。無黃。兩六。稻青。洞天郎。石無都。各先生交代トス。

○江面庵月次兼題集『今朝の春』梅』以上一人一題二付二句宛各題別々ニ半紙ニ認メ二枚四句ヲ一組トシ誌代前納者ハ一組無料他人ハ一組四錢餘ハ貳錢花評ノ天位ニハ端書十枚及染筆物呈上次回花評ヲ托ス通卷ハ全國大家トス花評ノ卷ヲ受ケタル方ハ必ず至急返卷ヲ乞フ。

○川柳集。狂句風隨意一組無料而笑子。劍花坊。千龍齋各先生選トス。○和歌集。願當季一人五首以上十首迄金子黨圖。坂正臣。兩先生選トス。○情歌集。願高尚ナル者ニ限ル制限ナシ選者藤庵。金升。靜遊各先生外斯道大家選トス。和歌ト情歌ハ隔月發表トス。

○清香句集。紫集。ハ選者二人以上三付同句二通り

謹賀新年

平素の疎音を謝し
將來の風交を乞ふ

一月元旦



△六行文學 (兼題雜句例)

今朝の春
かはらぬよ三千年の今朝の春
今朝みれば發句にてはなし春の興
佛より神を尊き今朝の春
三味線も小唄もならず梅の花
梅の花をぬすめさ月がさす
梅さいて帯買ふ室の遊女哉

大江丸
沽徳
とめ
來山
一茶
蕪村

△本誌定價三錢郵稅五厘六部拾六錢十二部三拾錢誌代前納申込者は種々特典あり誌代の拂込は郵便爲替に限る原稿其他の投稿爲替宛名等は必ず本社發行所宛の事

△注意 支社支部長は卷頭へ其の肖像略歴を掲載仕度候に付御寫眞(舊影新影何れにても宜し)至急御送すれなく御送り被下度無料製版掲載御盡力の萬一に報ゆべく候

大正二年十二月廿九日印刷
大正二年十二月三十日發行 (一部三錢郵稅五厘)
埼玉縣南埼玉郡清久村大字所久喜廿四番地
發行兼編輯人 田貴徳
埼玉縣南埼玉郡岩槻町百八十六番地
印刷人 齋藤清吉
埼玉縣南埼玉郡江面村大字下早見
發行所 清吉
電信番號 〇七

本誌 埼玉縣南埼玉郡岩槻町 水野書店
大 埼玉縣南埼玉郡菫浦町 青木書店

法香

阿庵

題于

新香初利

名後
阿
讀

老松や雪も古今の色をみす
 春に近よる明ほの、空
 藪入の支度に用の嵩むらん
 籠は潮干の獲物なりけり
 月落てさへ椽先の暖く
 築直しては廣過る庭
 醫の道もひらけくしけふと成
 生かひありてこんな白鬚
 新茶古茶宇治の薫の荷か届
 しけりの中の四阿をはく
 うれしさの文くりかへし
 斯合ふものかけさの辻占
 例年と違ふて近い月見先
 岨の芒のなひくまに
 罪につみ重るものは囀百舌
 持てと次郎は治郎丈の智恵
 焼めしに太平樂をうたふ花
 ひ、なくと豊なる里

山富羽

齊寶洲齊寶洲齊寶洲齊寶洲齊寶洲齊寶洲齊寶洲

次三

清風集



第百三十四號

紫集

◎相摸 永瀬霸天郎先生選

(天位景星)

(天) 天川を前に繩なふ家や月あかり 安藝奇想
 落葉して波さく果と也にけり 美濃冬海
 金網の諸鳥なくや秋日和 武藏耕樂
 流行唄槌の拍子や小夜時雨 遠江契甫
 時雨るゝは誰そ寒山か拾得か 相摸青黛
 馬はうま牛はうし連れ十夜哉 陸奥一塊
 秋百味奈長に來て菊胎など 武藏海塙
 軸 初冬の土間廣るにヒヨコ轉ぶ如 撰者 霸天郎

清香句集

永き日もつかひ通しの紙硯

めつきり殖た店の收入

當にせぬ異國人かあてになり

寒中とても易き船便

生姜酒寝すに風氣も抜きりて

立名を無理に消すはよくない

どれ程の功て廓の部屋双

あらしくしくもゆる硝子戸

畏ぬけの小鼠ひとつ取逃し

捨ては汲て鉋とく水

いつよりも佐渡山ちかき在明に

海道廣くわたる秋風

用て來て稻とき埃かふせられ

このあるしもものふの果

述懐の伴詩に感のおこりけり

竹林院を花の中宿

うくひすも下りて芝生の麗しく

◎三河 鍛雲居石芝宗匠撰

(三才景星)

(天) 枯柳池なほ古うしたりけり 上總曉翠

(地) 鯉を賣る船も來ぬ夜や鳴千鳥 周防南村

(人) 蝶のとぶ染屋の庭の小春哉 武藏菊友

名月や一望千里水白し 三河紫雲英

風になる星の光りや鴨の聲 武藏雪竹

うしろから風に追はる枯野哉 全香風

凭かゝる柱も得たりたき炬燵 越前伍風

開墾終へて果園十町秋はるゝ 遠江鷗步

軸 丹前もむかしの香あり置炬燵 撰者 石芝

◎尾張 楓園鶴宗匠撰

(三才景星)

(天) 衣かけの俵やこのかれ柳 筑後可祝

(地) しのび路に踏む氣兼の落葉哉 武藏泉山

(人) 百度ふむ月の宮居や木兎の聲 全全山人

冬枯の里にさびしき灯かな 陸中晚翠

よび出た雨を落葉にきく夜哉 武藏昇月

夕榮や峠の茶屋の蔦紅葉 磐城白水

齊洲寶齊洲寶齊洲寶齊洲寶齊洲寶齊洲寶齊

鮫汁に捕はぬ膳を並べけり 三河泉遊
譲りあふ心頼母し桐火桶 越後秀鶴
軸枯柳につなぎ捨なり渡し舟 撰者 鶴甫

◎越前 夢現庵袋溪宗匠撰 (三才景皇)

(天) 桃源の夢あたゝかや眠る山 武蔵一嵐
(地) こひならぬ忍び使や鮫の友 越後旭櫻
(人) 芭蕉忌や一茶のことも思ばく 信濃正香
酒かふて戻る孝女や雪の中 武蔵朴齋
煤掃やむしろの上に寶もの 全江東庵
夕月や逝きし友のしのばるゝ 渡島月鶴
秋の鐘うとき耳こたへけり 信濃朴仙人
五風十雨世は泰平や豊の秋 讀破一溪
伏見稻荷山にて 撰者 袋溪

○新聲集

◎諸家芳吟

抱いてね雪にこぼれけり 出雲前雲
御手植の松や榮えて君が春 全備前
海士の子の山に柴かる小春 越後中
初冬の格子にたたる朝日かな 武蔵越前
餅もつき酒もつく御代の鏡餅 全越後
改年のいひ重ねて鏡餅 全武蔵
福壽草心にはひ重ねて鏡餅 全越後
千古ふる杉や社頭になかりけり 全信濃
風や空にさくらつ星の影 全渡島
落葉ふみ妹が墓をば尋ねけり 全全
書初や筆に花のさく思ひ 全全
杉ふりて社頭厳なり初日の出 全全
俳聖の逸話にふけて雪あかり 全全
大正の世はちりもなし初御空 全全
別に夜のあけたりもなし初御空 全全
元朝の波は花なり伊勢の川 全全
若水や流れも清き五十鈴川 全全
秘めなき初夢いつか忘れ是 全全
初空や世は静なる君が御代 全全
戀しや子のおとけなし手毬唄 全全
元朝の丸の扇も床し御工合 全全
日の丸の扇も床し御工合 全全

能登 静岡 信濃 越後 茨城 全全 全全 越後 下總 羽前 遠江 全全 渡島 全全 信濃 下總 全全 越後 武蔵 信濃 越中 全全 備前 出雲
松梅水江江平柳一芝範壽翠孤如朝尋晴雲玉其明天壽敬梅
晨南
月史光庵庵山翠耕竹湖村村月月朗道嵐岳心竹月水風風年月

若水にうつつや下女の初笑顔 越三河
輪飾のばらと明け行空初日の出 越三河
初日の出を胸中なれ 越三河
旅僧の春をみけり床の道梅 越三河
初影や硝子戸の旭のみの出 越三河
初雪や地蔵の顔もさむげなり 越三河
元朝や一年の計こもむげなり 越三河
初鳥長者へ空斗り神の杉 越三河
初旅や恵方へ空斗り神の杉 越三河
初影や富士の目出たし初霞 越三河
朝影や入江に目をし初霞 越三河
暇折れはる江に目をし初霞 越三河
指折れはる江に目をし初霞 越三河
年折れはる江に目をし初霞 越三河
屠蘇や社笑の深み客斗り 越三河
寶船や社笑の深み客斗り 越三河
御降や社笑の深み客斗り 越三河
耳痒き朝花はたはまじる雪 越三河
朝霜や軒端はたはまじる雪 越三河
初夢をか軒端はたはまじる雪 越三河
長閑さをか軒端はたはまじる雪 越三河
初風や千代田の笑ふる村雀 越三河
初風や千代田の笑ふる村雀 越三河

常陸 全武 信濃 相摸 陸奥 北海道 常陸 遠江 全全 全全 能登 信濃 甲斐 全信 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
冷金阿水汀安伍秋笠梅春旭キ朴市玉雄松好長碎愛善翠栖菊碧
泉皴石雪阿住樓峰山白光山人風川水粵香江花月風雨山水山

◎社員新聲

山住の安し除夜とて宵ねする 上總 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
祝さかへまはす言葉ゆかき年の花 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
雪中の杉もかき初日の花 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
さきかき初日の花 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
神垣の杉もかき初日の花 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
我庵は可も不可もなし年の暮 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
杉もかき初日の花 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
真直に年たつ杉の社かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
初日影社頭の杉を始め町かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
寒月やふけて見通す町かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
からまた木老て頭巾の主かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
宰相も老て頭巾の主かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
いかにめしや霞の中に主かな 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
なく鳥の障子にひやく紅葉哉 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
山冷の肌そふ夜や雁わたる 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
時雨する度に尊とく神路山 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
銚杉をたらすや神のはつ明り 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
惠方からとんできたとや初鳥 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
風のととして行くや鉢の杓り 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
銚杉の餌袋さむう残りの春 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河
鉾のたとして行くや鉢の杓り 全武 陸上 伊野 因幡 信濃 尾張 伊勢 全全 全全 全全 全全 全全 越前 三河 三河

さきかへぬぐみ持ち見冬の梅のさかんや榎木ひかる初日の出
 杉の間や檜の國をどましけり
 春の價をしらぬ顔なり松の内
 酒のれ家も春はもれす梅の花
 かく題の歌や、なりは筆はけり
 勅初に心のちりもはらひけり
 掃初に心のちりもはらひけり
 面白子に、非画でさたり筆始め
 遣羽子の來よと誘ふや格子先
 遺初や末たのもしき筆のあと
 初空や千代よぶ鶴のまふ姿
 元朝や松に日のさす雪の門
 元日ややすならぬ身、御代の
 あける空耳新らしやはつみ
 産井の銚杉たかしやはつみ
 橋のねた犬のあとし朝の霜
 初鶏やきかぬ所は去年のやみ
 屠蘇三献太平樂をうたひけり
 勤儉の自働車もあり年の坂
 日の脚に人の追はる、師走哉
 柴折戸あけて初日を拜みけり
 (天山) 寺や落葉が中のいし
 月さむし道行く人の浪花節
 枯柳水際たかう成にけり
 寒月の太刀とく桶を覗きけり
 白濱に千鳥なく夜の簪かな
 落こぐ舟に驚く千鳥かな
 (軸) 年の市途中で用のふゑにけり
 (天) 全評 遠江 江名庵浪山詞宗撰 (天位景呈)
 越前小舟
 雲井迄工夫をあげる花火かな
 借りた傘又かしてやる吹雪哉
 石門に紅葉ちりけり山の下
 氣の毒の様に隣へち葉哉
 初雪や繩のみ白き四ッ目垣
 相摸撰者 浪
 (天) 全評 遠江 江名庵浪山詞宗撰 (天位景呈)
 越前小舟
 雲井迄工夫をあげる花火かな
 借りた傘又かしてやる吹雪哉
 石門に紅葉ちりけり山の下
 氣の毒の様に隣へち葉哉
 初雪や繩のみ白き四ッ目垣
 相摸撰者 浪
 (天) 全評 遠江 江名庵浪山詞宗撰 (天位景呈)
 越前小舟
 雲井迄工夫をあげる花火かな
 借りた傘又かしてやる吹雪哉
 石門に紅葉ちりけり山の下
 氣の毒の様に隣へち葉哉
 初雪や繩のみ白き四ッ目垣
 相摸撰者 浪

江面庵兼題集

(花評) 天位者は次回

◎ 花評 秋田 佐々木米川詞宗撰 (十枚景呈)
 (天) 桃山の御陵尊く時雨けり
 色つかぬ楓を呪ふしぐれ哉
 駕籠いそぐ並木三里や夕時雨
 遠江 信濃 巨 流
 下總 守 人

通卷

(天位) 柱掛表裝軸物

◎ 備前 村上曲水宗匠撰 (地人牛切一枚ッ、庵主筆景呈)
 (天) 井戸端に話の残る時雨かな
 地時雨る、やはなれくの夕鴉
 人念佛に腸あらふ十夜かな
 常陸 秋 越 越 越 越
 星 輝 天 中 天 水

梅ささちんまりしたる庵の畑
 のつと出て海一ぱいの初日哉
 世をしのぶ人の小庭や枇杷の花
 やり羽子や互にかくす戀の仇
 元日はふじの峰よりあけて初鳥
 初日や床に明治史君が像
 元日や床に明治史君が像
 初日や床に明治史君が像
 何處まで國威か、やく初日哉
 寒鯉や姓婦いたはる藥喰
 △ 五客▽ (景呈)
 初東風に首ふる虎や玩具店
 いつよりも大きく見ゆる初日哉
 初日影さすや二見の夫婦岩
 初風呂や磨き上げたる男振り
 若水や松にかけたる小提灯
 △ 三才▽ (景呈)
 人初雞や神のともしの吉丁子
 地若水やつるの餌壺に一雫
 (天) 注連繩のふとし春日の二本杉
 (軸) 初空や仰くも高き神の杉

類冠りの人を行く時雨哉
 富士筑波二つにわけて時雨見
 時雨くや氣短になく夕からず
 (軸) 放課遠出の生徒や橋の夕時雨
 (天) 全評 安藝 松龜居巴汀詞宗撰 (景呈全上)
 遠江笠山
 ねてからも念佛申す十夜かな
 川岸を下る十夜の小提灯
 網代守る人もきて居る十夜哉
 日蓮宗ある寺町の十夜かな
 戸一枚あけて柿うる十夜哉
 (軸) 涙をかみ乍ら念佛の十夜哉
 撰者 巴 汀
 撰者より天位の方へ景品郵券拾五錢を贈ら
 されたり

香焚て静に時雨きく夜哉
真心はくまなき月の十夜哉
時雨や御堂にこもる僧一人
大根に味のつきけり初時雨
馬斗り酒屋の門に時雨けり
軸傾城の丸鬚目だつ十夜哉

△初雁の巻 江面庵主捌
彼岸となれば寺も忙しき石見道味

遠音ひく鐘もどこやらうた寒く
（治定）大工の弟子の飽ゆるめる

（次点）座ればひざに猫の来るなり
味増汁に迄味のつきけり

手もつけられぬ程の熱燗
また氣にかゝる鴉啼なり

忘れちやすまぬ御意見の筋
次 雑（無季）にてつくる事

◎名譽句集（支社支部長幹事の句集なり）

（社）水仙や窓に日のさす朝茶哉
兔や角といふ間に冬の日はくれて

治定 神官も僧侶もまじる歌の會
次点 市毎に景氣の直る錢廻り

二三人都の客の珍らしく
世話やいて居るか主人の役目顔

初陣の幸先祝ふ大一座
數々の船見事なる田子の浦

◎金蘭集（一ヶ年以上繼續の社員玉句を掲
部類に類し頒布すべし）

年波や心の楫も無事にこす
よき夢のさむるや窓に初明り

遠慮なきむかし話や楳の主
七五三繩をくゞりて高し神の杉

遣羽子や島田娘のみだれ髪
牙出して恵方に向くや檻の虎

斧入れぬ社の杉に初日かな
元朝や社の杉のふかみどり

越後 美佐雄
信濃 其月
備前 湖壽
三河 昇水
武藏 昇水
撰者 曲水

姦ましや女まわりの惠方道
まづ無事を清香の友へ御慶哉
孫抱いたまに箸どる雑煮哉
なんどなく世は静なり寅の春
初空やぬ立ちたるふじの峯
入營や身のすこやかも親の恩
年立つや老も若きも千代祝ふ
初鳥うき世のやみを破りけり
若やぎし妻の化粧や二ヶ日
うなぬ子の指折り數ふ春近し
初東風や社頭の杉につるの聲
（部）門松やいく世かはらぬ古き家
仙離もきませ千代ふる神の杉
初日の出森羅萬象あらたなり
神苑の杉千尺やはつ明り
あつたらぬ勸化はて年の行く
今少し身の丈ほしや煤掃
目出度三年かされて御代の春
笹啼や閑居ひと日を詩にふけて
はし紙に雑煮をいはふ一句哉
世は義理にかたり結ひ御慶哉
平凡にくれたり又も一ヶ年
千年ふる要意はこゝか雪の筆
動きなま御代豊なり初日の出
枯芦や日影静にいけの鳥
よしあしも心一つや初ごよみ
元日や六合きよき朝ばらけ
羽織きて麥ふむ人や小春風
風邪めすと乳母が氣遣炬燵哉
茶をくま日はなし菊の咲きよ
初東風や菟帆はらむ墨田川
松影の障子にうごく初日かな
水仙や繪絹はしたる日南椽

◎特友句集（支社支部を繼續したる支社支部
長幹事の玉句を掲く句數無制限）

數入や京の流行を着かざりて
驚まふや雪の薨に日のあたる
動きなま大和島根や初日の出
元朝や男の子生れて初詣
寶物をさがし出しけり煤掃

越後 旭櫻
三河 碧山
渡島 山月
越後 輝星
遠江 月冷
信濃 秋月
東京 正香
越前 旭南
下野 郵水
比良枝

◎地。方。俳。信。

◎福井縣 朝日僚友會第卅例會句集 寶泉居宗匠撰

(天) 虫の音もしづまる月の夜明哉 風 樹
(地) むしなくや草に埋れし志士の塚 一 聲
(人) 虫賣や嵯峨野の秋を一擔ひ 夢 中
虫なくや出水のあさの破れ垣 閑 雲
あばら家の哀れかこつかわむしの聲 征 翠
自炊子が物かふ町や朝さむし 一 聲
朝寒やしつこうこかぬ底の魚 閑 雲
朝寒に返事のおそき渡船哉 天 筒

◎全 上 第卅一會例會句集 寶泉居宗匠撰

(天) 志士の碑や赤き心を夕紅葉 一 爐
(地) 行きくれて嵯峨に一夜や紅葉狩 天 筒
(人) 病室の天井にらむ夜長かな 一 聲
傾城の身元き、たる夜永かな 南 聲
合宿の咳に目さます夜長哉 吉 禪
義士傳をよみつくしても夜長哉 詩 禪
奈良の宿紅葉に鹿の端書哉 景 水
近きより遠き夕日の紅葉かな 雲

◎越前 國見同風會第十一例會句集 寶泉居宗匠撰

◎謝告 庵主へ年玉として金五拾錢長崎
柴の戸高臥殿金拾五錢岸本晚翠
殿 右拜受致候也

◎誌代前納諸君芳名録 (○は一ヶ年領收の印)

△秀甫△藤花△一景△文舟△溪水△一橋△山
水○曉吾○正○菊水○其次○芝守○柳葉△山
林月○北川△湖舟△蘭舟△士口○淺雄○香風
○窓月○巴石△岐村△翠波△東洋△如石△松
山△天籟△貳葉△秋汀△秀月△華嬋△春水△松
與五郎△三子△稻香△末吉△次郎△香龍△計
正治△冷水○交三△野秋○其光△刀草○田主
△馬太△涼月○晚櫻○勇○初井△白太△田月
△蕉佛△竹雪○旭雀△憲月○稻月○白太△田月
月△笑子○春來○春水△溪關△脩一△松鶴
△菊水△孤月△文車△龜友△英雄△喜節△恒
夫△音吉△雅吉△愛子△松陽△水月○富望
△杉月○掬水△芳旭△知風△秋汀△松濤△金貳
圓△越前殿下支社○孤月女以上領收候也

◎新年之御慶目出度申納候客年中は本社の爲
め掛からざる御補力と御引立とを蒙り御庇蔭

(人) はら／＼さきては日のてる時雨哉 全 人
宿ればはれて日のさす時雨かな 全 人
西はてり東はくもるしぐれ哉 全 人
役僧の十夜かざりや忙しき 神 陽
若後家の珠數つまくりて十夜哉 郵 水
夕時雨足のはこびもはかさらず 介 山

◎越前殿下重影會第廿八例會句集 寶泉居宗匠撰

(天) 雁なくや端山にかゝる月の影 好 香
(地) 風呂をたぐ柴の煙や初時雨 長 江
(人) すき間もる月影寒き夜也けり 好 香
時雨るゝや窓にをくらき古障子 翠 雨
野路を行く行脚一人時雨けり 碎 花
秋行くやさり残されし柿一つ 全 人
刈り入れり稻をはず間に時雨哉 松 果
木枯やなはてをいそぐ旅の人 全 人

◎風雅欄 (入門願雅号庵号を望まるべし)
(郵券參錢をへて申こまるべし)

越前田中溪關殿 三河中原弘月殿 信濃宮島
孝天殿 下野大野三子殿 全上大森末吉殿
全上荒井又次郎殿 全上益子吞龍殿 全上増
を以て年を逐ひ盛況を呈し候段難有深謝仕候
猶本年も倍舊の御引立を以て相變らず多々御
投吟の程希上候先は新年の御祝辞旁御禮申上
候 敬具

一月元旦 清香社長 江面庵富寶
全副社長兼編輯長 寶泉居機得
外 本社同人一同
本社員並全國大雅諸君

賀正 不ふ庵男爵
紀州 川口梅谷

賀正 尾張 羽洲園羽洲
大坂 佳芳堂北叟
三河 鋤雲居石芝
大坂 不二庵月人

賀正 武藏 江面庵富寶
全 寶泉居機得

謹賀新年

清香支社長 一同
清香支支部長 一同
清香支支部幹事

恭

上野安中町扇連吟場主幹
五葉庵 小坂橋 甘字
埼玉縣比企郡八和田村
江容庵 克己
長崎縣高來郡深江村
柴の戸 高臥
下野足尾町松原
三上野 秋
信濃下伊那郡下條村
風交會主幹 江雅庵 花月
三河渥美郡高師村字野依
野依支部長 麗月庵 晚翠
磐城久之濱町北町 遠藤賢一郎事
清香支社長 花雪庵 窓月

賀

九道書紀三年一月號には有名宗匠の肖像及
染筆物を寫真版として掲ぐ
一本誌には俳論、俳話、新体詩、和歌及俳諧
に關する記事を掲載す
一本評、餘興、精華、角力、折句、附勝俳諧、
賞與集にして景品は金時繪硯箱、表裝附掛
物揮毫全紙、半折扇子等の風流品とす
一壇員には無料投吟の規定壇則にあり
一未だ本誌を知らざる俳人は本評十句一組拾
錢を添へ申込む時は一月發行第四十號を送
呈す

旭崖俳壇

岡山縣眞庭郡 落合町 振替口座大坂四四六二番

席額俳句募集

拜啓時下寒氣相増候處各雅益御精健奉賀候陳
者小生儀這回江面庵宗匠より立机差許され候
に付大家宗匠三名に依頼し是が紀念の爲め席
額俳句を募集し永久に残さんとす四方の風士
御賛成ありて御出吟あらん事を奉懇願候
江湖庵・梵壽白

新

長野縣更級郡信田村(當時三河泉村)
大澤準治事
江湖庵 梵壽
下野那須郡親園村花園
小林 一笑
秋田縣鹿角郡小坂嶺山
佐々木 米川
栃木縣那須郡湯津上村
旭山 大森 末吉
全所 増山 稻香
常陸行方郡武田村内宿
五世 其寶堂 一良
下野足尾町松原 舊号仁風
改号披露 三上野 秋

禧

廣告欄



◎本評題 四季隨意 (但御思召は拜受す)
武藏 江面庵富實宗匠撰 (切大正三年一月卅日
遠江 大蕪庵十湖宗匠撰 (開卷全年二月廿五日
近江 柳影居靜人宗匠撰 (返草以後三十日內
◎賞各天位へ撰者染筆物軸物一幅地人へ全上
染筆掛物地一葉宛外合点高点一號より二十號
迄立机焼付大盃一個宛廿一號より五十號迄撰
者宗匠短冊一葉宛五十一號より百號迄美景呈
賞 ◎花評 江湖庵梵壽拜撰
天位師翁染筆軸物地人へ俳諧新歲時記一
部宛五客へ端書十枚宛十客へ全五枚宛以下三
十號迄美景呈上五點以上出版返草
詠草明瞭を乞ふ
玉句集所 要知縣渥美郡泉村 大澤梵壽裡

◎草の花第貳號俳句大募集 入各卷二句、八句一
組金十仙餘は五仙宛
春 因幡 文合庵機外宗匠 各天位表裝美卷
夏 東京 夜雪庵金羅宗匠 地染筆半切一葉
秋 上總 花月館貞雄宗匠 人肉筆短冊數葉十内景
冬 美濃 松旭庵其光宗匠 四評合点景
一等俳諧辭典一部二等絹
物表裝一幅三等大家筆掛
物表裝一幅四等五等有益俳
書六等より十等迄染筆物

詞句集題 初日、梅、入花 二句一組 六仙ツ

○配園江東居天龍宗匠(細評)大關表裝美卷
景 大關國漢辞典一部關脇葉書五十枚小結有
益併書一部(幕の内法筆物)切二月三十日發行
○注意(詠草は二句ツ、別紙のハ半紙四ツ切入花)
玉句集所 埼玉縣入間郡入間村水野 入間吟社

俳諧研究 月の友

本誌は開發的方針を以て俳句、連句、俳文の
研習に便ならしむべく月刊發行す彼の何派を
以て論ずるものに非ず請ふ大正の俳諧を研鑽
せんとするの士は來れ見本一冊拾錢
下總國香取郡八都村 月友社
主幹 高木 蕉風
編輯 鶴見東風 金親 文葉
幹事 大八木文村 矢部 富堂
修監 香樹園耕雨

○追悼句懇請
荆妻清子事永々病氣之處醫藥効を奏さず本月十二日黄泉の
客と相成り申候仍りて天下風土の吊悼句を懇請し靈魂を慰
め申度此段奉願候也
越後國古志郡山本村字乙吉 高橋淳一郎
号 美佐雄

○深江庵高臥立机披露俳句大募集
四季隨意 入花 六句一組十仙二組目よ
り五仙宛切手代用參錢切手以下
撰者 武藏江面庵富實下總香樹園耕雨長崎
太古庵鈍々諫早桐子園一々島原青雪庵湛露
各宗匠撰

○祝評 深江庵高臥謹撰
投稿規定 投稿規定用紙は半紙にして表二句一組裏
に雅号住所姓名を認む各六通を要す但も撰者は六通共
同一句にてよろし

但し郵券代用參錢以下にして必ず一割増の事

春之卷 甲 東京 雪中庵宇貫宗匠 各奥抜 落巻
乙 武藏 帶月庵淺水宗匠 四季 合点
夏之卷 甲 東京 其角堂機一宗匠 三才 五客
乙 武藏 雷柱子應雅宗匠 美景
秋之卷 甲 三河 鋤雲居石芝宗匠 合点天位納巻
乙 武藏 器月庵陶海宗匠 三才 五客
冬之卷 甲 武藏 寶泉居機得宗匠 三才 五客 美景
乙 全 青木五大洲先生 合点天位納巻
通巻 武藏 江面庵富實宗匠 三才 五客 美景
全 一無庵一無宗匠 三才 五客 美景
御投吟の際短冊又は色紙にて靈前手向吟を乞ふ
右大正三年一月廿五日限堅切二月十五日晴
雨に不拘久喜町高田亭に於開卷總秀逸以上美
冊に仕立返草可仕候
埼玉縣南埼玉郡久喜町 企 大正連
引 受 保證 江面庵富實
埼玉縣南埼玉郡久喜町 相馬 風來
全 江面村 清香社

大集文音所

○景 各天句落卷三光宗匠染筆五客十賞賞呈
遊賞按句多數者一等に鉄翁四君子表裝掛軸二等五岳書
全紙三等南列翁石版摺全紙書呈上
○發表 深江第四回報告誌上に掲載す祝章短冊御惠投を
乞ふ
○切 大正三年一月三十一日
長崎縣南高來郡深江村深江俳社
文音所 責任 小林 高臥
振替口座福岡四六七七番
加入者 小林 榮藏

俳梅之雫 (毎月十日發行)

社會の進歩に伴ふもの豈斯界のみならんや萬
物皆然り斯道を研究せんと欲せば來れ往復は
がきにて申込るれば無料進呈すべし
梅之雫發行所 三重縣津市新町八丁一〇〇
梅流社 主任 明雪庵流美

社告

本社顧問花廼本花翁宗匠病氣の
處本月十六日後四時逝去致され
候條本社員に報告し併せて同宗匠の靈魂を
慰め申度哀悼句御手向として御出吟下さ

受人

43.12.-5

度願上候

◎俳人名簿

豫約價六拾錢

右本月中出版御送本可申豫告致置候處折惡敷
年末に際し印刷所非常の多忙に有之一月下旬
又は二月初旬ならでは配本致難く候間何卒暫
時御猶豫被下度願上候也
追て豫約價未た御拂込無之方は一月二十日を
限り必ず御送付下され度候送本前際に至り候
ては自然配冊も後廻しに相成調査上にも不便
に有之候間此段御含可成早々御送金願上候也

豫約俳人名簿 會計部

◎名譽員推選

(社員五名以上を勸誘入社
せしめたるを推選す)

- 埼玉北足立支社長 井上柳葉殿
- 全 第一部幹事 赤熊清山殿
- 全 第二部幹事 山崎泉山殿
- 全 第三部幹事 松本湖山殿
- 全 第四部幹事 榎本春來殿
- 全 第五部幹事 樋口昇月殿

全

全

全

- 全 幹事 増山稻香殿
- 三河 劉谷支部長 神谷吾一郎殿
- 吳 支部長 (再興) 田上政義殿
- 北見 支部長 出路一寸殿

以上頭書之支社支部長幹事に推選候也

◎廣告料五號活字二十字詰一行拾五錢五行六
拾五錢半頁壹圓八拾錢一頁參圓四拾錢にて
御依頼に應ず但し數月連載の分は割引す社
員は二割引其他割引一切不致候事

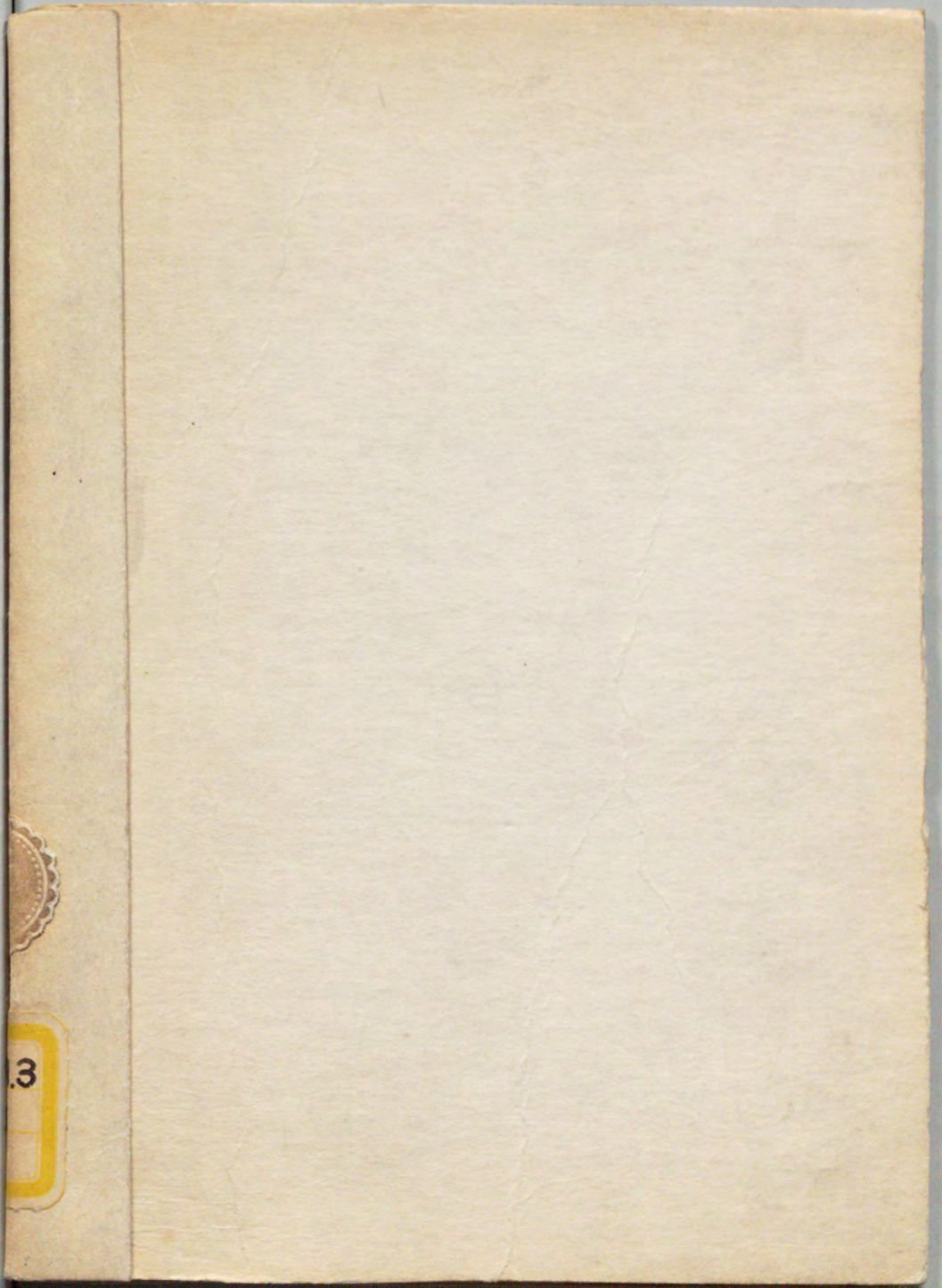
ちらし挿入手數料は千枚金七拾錢五百枚金
四拾錢其以上は御相談にて取極可致候但ち
らしは本誌大より小にして清香第何號附録
と印刷せらるべし

右毎月十五日限り御申込の事前金に非ざれ
ば記載不致候事

◎◎◎見本御申越の節は有合の品を呈すべし
御照會の書信はハガキ又は返信料を要す然
らざれば回答せず

◎◎◎書信に不足税あるときは受理不致候事
誌代前金切の節は封皮に前金切の捺印致候
間相變らず遅滞なく御納入下され度候

明治三十三年四月廿三日(清香第三百三十四号) (大正二年十二月十四日發行) (明三十三種郵便物認可)



3